



第134号

2021年6月1日発行

千葉大学教育学部
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33

自然災害等と子供たちへの期待

同窓会会長 町田 義昭
(S 41・3 卒)

近年、気候変動による猛暑・台風・豪雨・豪雪など様々な自然災害が次々に起こり、社会全体がその対応に翻弄されています。

まず巨大台風。気圧、大きさ、風雨の強さ等々相互に関係がありますが、今まで想定していた以上の規模で、千葉県内だけでなく全国的にも多くの場所が被害に遭っています。住民の皆さんが、予測もしなかった状況に直面しました。

次に豪雨禍。気圧配置により、大雨が突然・局地的・短時間に降ってくるので、準備をする時間の不足が特徴のように思われます。単純に二百ミリメートル／時と言いますが、そのエリアに満遍なく一時間に二十cmの高さの雨が降れば、低地はたちまち水であふれます。特に、昨年は線状降雨帯なる新しい言葉が現れました。

昨年末には、豪雪被害が報道されました。

これらの災害がこれで終わりというのではなく、常態化し、毎年これ以上の規模で、しかも複数回起こる可能性があります。

このような諸現象に共通して出てくる言葉が、「産業革命以降の化石燃料消費と二酸化炭素放出」「温暖化」「海水面の温度上昇」という言葉です。太陽から供給されるエネルギーが増加しているとは言われません。降り注ぐエネルギーをより多く蓄えているのでしょうか。このままではどんどん地球が壊れていき、次世代あるいはその次の世代の子供たちに深刻な状況を及ぼすと思われるかもしれません。もちろんその前に脱炭素等、適切な対応によって改善されると信じています。

昨年になってから突然、新型コロナウイルスの恐怖に見舞われています。すぐに収束するかと思われましたが、たちまち世界各国に広がり、楽しみにしていたオリンピックも延

紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいき だより	4・5面
私の学園生活	7面
卒業を迎えて	8面
現役の学生から	8面
読者の声	9面
我が学舎の今昔	9面
海外の教育施設から	10面
支部だより	10面
新入生の声	11面
事務局より	11面
物故会員	11面
同窓生の美術館	12面
編集後記	12面

期になってしまいました。

学校現場も全国一律の休校措置で、地域も行政も保護者も学校も、特に子供たちに与えた影響は計り知れないものがあります。

ウイルスは目に見えず、全ての世代の人々に区別なく影響を与えます。しかし、世代によってその捉え方が違います。「二十歳代はかかって重症化することが少ない」との報道があると、「我々がかかって大丈夫だ」という勝手な解釈の元に、巷に出て行つて感染してしまう。本人たちは重症化しないが、家庭内で高齢者や基礎疾患をお持ちの方が感染すると大変なことになります。「自分だけは」との安易な行動が重大化していく要因になってはいないでしょうか。個人の責任が社会に与える影響の大きさを痛感しています。

ウイルスへの対応と経済との関連も二律背反的な要素を持ち、対応に苦慮している関係者の苦悩が忍ばれます。ウイルスの抑え込みに成功しても、今までに被った甚大な影響を克服するまでにはさらに多くの年月

を要すると考えます。

しかし、学校現場は、年々子供たちが成長して育っていきます。何年か後に解決できれば良いという問題ではなく、現在の子供たち、そしてこれからの子供たちに影響なく学校生活をしてもらわなければなりません。各教育委員会、各学校、そして全ての保護者が心を一つにして対応しなければなりません。関係者の方々の苦悩と努力を見聞きすると、頭の下がる思いがいたします。めげずに頑張ってください。

科学技術先進国の一つである我が国は、自然災害克服やワクチン開発等押し寄せる諸課題を克服し、それを解決していくことと思います。それを生み出すのは、人々の英知・創造力・判断力・決断力・実行力でしょう。これは小学校からの自然科学教育に力点を置いた取り組みとこれを受け止め、育つてゆく子供たちの力と研究機関等の充実であると思えます。



吉兆墨

特別寄稿



未来を切り拓く

(株) オフィス鶴羽 代表取締役

鶴羽佳子

(H3・3卒 札幌市)

札幌で起業して二十二年。テレビ番組の制作と研修の会社を経営している。大分県で生まれ育ち、千葉大学教育学部を卒業後、アナウンサーとして北海道放送(株)に平成三年に入社。退社後フリーになり、NHK札幌放送局でキャスターになった。その時に、プロデューサーから「番組制作スタッフが足りない。探してほしい」と言われたのがきっかけで会社を作った。

頼まれて作った会社の社長。何もかもが手探りで、キャスターをしながらディレクターもし、経理もやらなければならぬ。源泉つてどうするの？ 決算って何？ のスタートだった。スタジオで照明が当たると、原稿を読む。次の日は床に這い



つくばってフロアディレクターをする。カメラもかつぎ、重い荷物も運ぶ。料金交渉もする。アナウンサーの殆どは裏方の仕事をしたがらない。華やかなオーラが消えるのを嫌がる人も多い。落ちぶれた感も避けた。当時は惨めで何度も泣いた。でも色んな仕事を経験し、人間としても成長できて良かったと間違いなく思う。

出来るか、出来ないか、ではなく、まずやってみる。その精神は大学時代に培った。私は千葉大を留年している。アナウンサーを目指したのが三年の三月、研究室の一つ上の先輩が名古屋のテレビ局に合格し、卒業前のコンパで「鶴羽ちゃんも向いていると思う。受けてみたら」と勧めてくれたのがきっかけだった。調子に乗って受けてみた。しかし全滅。数社に最終試験まで残れたこともあり諦められず、でも、どのテレビ局も新卒採用が基本ということもあり、留年を決めた。「もし駄目だったら？」という不安は当然あった。

親との約束で挑戦は次の年だけ。落ちたら大分に戻って教員採用試験を受ける。授業料も生活費もすべてアルバイトで稼ぐ。仕送りはなしという約束をした。迷ったり悩んだりしたら絶対落ちる。強くなれ私！とひたすら言い聞かせた。翌年、四社目に受けた北海道放送に内定が出た。この時の経験が今の私の礎となっている。

三十六歳で出産をし、核家族でしかもフルタイムで、仕事をしながら母乳育児をする大変さを身に染みて感じ、その奮闘記をまとめたエッセイを出版した。

その頃から教育に関わる仕事が増えた。大学の非常勤講師や札幌市社会教育委員、北海道生涯学習審議会委員、そして北海道教育委員、文科省中央教育審議会初等中等教育分科会臨時委員など公職も務めてきた。北大大学院修士課程で学びもした。

子供の小学校ではPTA会長も引き受けた。子供が身体を動かしながら遊ぶ機会がないと知り、小学校に総合型地域スポーツクラブを立ち上げた。子供たちと一緒にバスケットボールをしたら、転んで顔から落ちたりするなど加齢を感じながら私も楽しんで

いる。コロナ禍で二か月間活動が休止になったので、オンラインと一緒に運動をした。小学一年生でも、親のスマートフォンであつという間にZoomができるようになって驚いた。

コロナ禍で生活も仕事も激変した。時代の大きな転換期の真つただ中とは、こういう状況なのだと感じる。この時代に育つ子供たちに強くなって欲しい。未来を切り拓く力を身に付けて欲しい。そう願わずにはられない。そして、大学には人生を変える繋がりがある。私の場合は、恩師である明石先生の存在が大きい。当時教育学部の教授だった明石先生の研究室は大人気だった。先輩たちも正直変わった人が多く、刺激的で賑やかで本当に楽しかった。勉強は苦手だったが、先生が大好きだったので、研究室にいつも入り浸っていたことを今も鮮明に覚えている。先生に留年を相談し、助けて貰えたからアナウンサー試験が受けられた。退社後「教育の道にも関わるべきだ」と、北海道の教育行政の関係者に繋げてくれたから教育の道にも進むことができた。ずっと感謝し続けている。千葉大生で本当に良かった。

同窓生の美術館



かずさギャラリー&陶房



「陶芸に生きる」 魚地貞夫氏

(S34・3卒 一宮町)

「大地から生まれる」

力強い作品の数々」

陶芸作家・魚地氏は長く東京都の美術教育に携わってこられました。

かつては、ガスや電気・油の窯で制作していたそうですが、しだいに松薪を焚いて作品を制作する穴窯の醍醐味に魅了されていったとのこと。四昼夜寝ずに薪を焼べ続け、千二百五十度まで温度を上げる工程だけでも

かなり大変なことだと思いますが、年に一〜二回は多くの友人とその家族と一緒に静岡に出かけ窯焚きが続けていらつしやるそうです。

今後も体力、気力、意欲が続く限り制作したいと力強い意気込みを語ってくださいました。作品の一部を紹介します。

(文責 古山文夫)



炎と対話しながら薪を焼べる魚地氏

燃えさかる炎
見つめる温度計
高鳴る期待感!



緋色壺 径34cm 高36cm

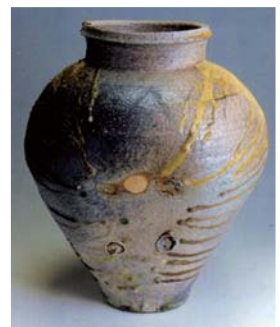
降り積もった灰の中から生まれた表情豊かな作品



大皿 径54cm 高さ 9 cm



水差 径13cm 高さ19cm



窯変大壺 径47cm 高さ55cm

個展のお知らせ

魚地貞夫作陶展の開催

期間 令和三年六月二十九日(

八月二十九日)

会場 茂原市美術館・郷土資料館

編★集★後★記

新型コロナウイルスの猛威に、世界中が不安な日々を過ごして一年余り。この百三十四号がお手元に届く頃には、ワクチン接種がどれ程進んでいるだろうか。▼このような中、玉稿をお届けくださった方々に感謝の言葉や気持ちを表しながら編集作業を行った。「読者の声」にも励まされながら。▼先輩方の「いきいき」とした日常、二支部の前向きな取り組み、新進の同窓生の声等に同窓会の質の高さを感じている。▼一方、子供たちに関わっている方々は、コロナウイルス禍での戸惑いや指導の困難さに立ち向かっている最中である。ブリスベン補習校でも同じように御苦労をされている。この状況下での工夫や活路を見出している実践に頭が下がります、また頼もしい。▼特別寄稿をお願いした鶴羽さんが、「時代の転換期」「子供たちに強くなってほしい、切り拓く力を身に付けてほしい」と述べられている。町田同窓会長の巻頭言でも、「子供たちへの期待」、それは「小学校からの教育の大切さ」と言及されている。▼ところが、教員志望者が極端に減少している現状があり、憂えている。千葉大教育学部生には、日本の未来を担う子供たちを育てる教員にぜひ、なってもらいたい。

(文責 宮葉清子)